浮世絵にみる蚕糸

日本の蚕糸業史：日本の養蚕は弥生時代から行われてきたと言われている。しかし、平安時代以降、生糸や絹製品が中国から輸入されるようになると、断絶したわけではないが、養蚕はほとんど資料に残らなくなるほど減少した。江戸時代に輸入が長崎に限定され、中国からの生糸の輸入量が江戸幕府によって制限されると国内の生糸が不足し、元禄以降に養蚕が復興してくる。このため他の農作物では江戸時代以前からの品種の記述があるが、カイコの品種に関する記述は元禄以降にならないと見当たらない。つまり、日本の養蚕技術は意外に新しく、元禄期以前の古い養蚕技術についての情報は全くの皆無である。

浮世絵に描かれた蚕糸：江戸時代に養蚕に関する技術書が記されるようになるとともに、「桑摘み」、「育蚕」、「糸繰り」、「機織り」など蚕糸業の一連を題材とした錦絵（浮世絵）が描かれることになる。蚕糸を描いた錦絵は北尾重政・勝川春章が狩野永納の「耕織図」を参考に描いた「宝能縷（たからのいと）かいこやしない草」(1696) が最初と言われている（右図)。元絵となった狩野永納の「耕織図」も中国の宋代の楼璹の「耕織図」(1210) を元にしているので、どうも中国っぽい錦絵になっている。現在、桑樹は摘桑しやすいように毎年剪定して樹高は高くない。しかし、江戸時代にはそのような剪定法は確立しておらず、桑樹は普通の樹木のように高く、梯子や踏み台を使って桑を収穫していた。現在では見ることが出来ないが、右図のような浮世絵を見ると想像ができる。その後、多くの浮世絵師が蚕糸作業の風景を描いている。その中には有名な喜多川歌麿や歌川国芳もいる。

浮世絵に描かれた作業の構図：当初、それらの錦絵は「耕織図」の構図を模したものが多い。元絵が中国のものであり、また、浮世絵師が実際に養蚕を知っていたか分からないため、描かれた錦絵の信憑性に疑問符が付くのは仕方がない。しかし、時代が下るに従い、パターン化していた構図から日本独自の描写が出てくる。例えば、糸繰り作業は、江戸時代後期に開発された座繰り機が書かれており、変遷を追うことができる。

残念ながら、どの絵師もカイコ幼虫をキチンと描いた絵師は居ない。よくよく見れば「これカイコ！？」というものばかりである。下図は世界的に有名な喜多川歌麿の「かいこやしない草」の一枚で、大きく育ったカイコ幼虫（筵の上）に桑葉を与えている錦絵である。流石歌麿、女性陣は皆美しく描いていており、カイコ桑葉は葉脈まで描いている。しかし、カイコ幼虫についてはまるで米粒のようである。絵師がカイコを知らなかったとしても手抜き過ぎると見るたびに思う。東京農工大学科学博物館には重政、歌麿をはじめ、蚕糸関係の多くの浮世絵を所蔵しており、そのうち４００点以上を公開している。興味のある方は是非ご覧ください。

https://archives.tuat-museum.org/s/da/page/welcome